

ロールされてるんだから、大変な話なんです。本当だったら新聞社・テレビ局全部大騒ぎしなきゃおかしいじゃないですか。なんで野中(広務)さんがいって、あとは『週刊ポスト』が書いてるだけなんですか? 東京新聞はいい記事を書きましたよ。(中略) テレビ朝日やればどうですか、本当に。(機密費は)回ってるんですよ」

勝谷氏のボルテージはさらに上がり、「記者クラブでスブスブの人たちは、(中略)匿名性の陰に隠れてるから、もらっても別に会社クビにならないんですよ」とぶち上げた。司会の阿川佐和子さんが「ちょっと触れるつもりがこんなに盛り上がると思わなかった」と驚いたほどだった。

このように、黙殺を決め込んだはずの記者クラブメディアを舞台に、フリーランスがゲリラ的に局地戦を展開し始めた。こうした動きは、実は同時多発的に起こっている。

たとえば5月29日、久米

宏氏のTBSラジオ『ラジオオナンドスケド』に私が電話出演した際には、本来は別のテーマ(鳩山由紀夫氏)だった、わざわざ久米氏の方からこの話題を持ち出し、「絶対にやるべきです」「ぜひスタジオに来て機密

イタリーの靴買ってやる

この問題を封じ込めるために、私のスキャンダルを探す大メディアさえ現われているなか、こうした援軍は非常に心強い。

5月28日のテレビ朝日系『朝まで生テレビ』は、鳩山内閣がテーマだった。機密費は議題になかったが、司会のは田原総一朗氏である。私は始めから仕掛けるつもりでいた。終了間際、ようやくその場面は訪れた。

上杉 先月(4月23日)ですか、野中広務さんが那覇での講演の中で、官房機密費を田原総一朗さんだけに渡していいと証言しましたよね、突然。田原 それを聞かれるのは

費について話してください」「僕は何も怖いものはないから」といつてくれたのだ。ラジオではほかにも、吉田照美氏が文化放送『ソコダイジナトコ』で毎日のようにこの問題を取り上げてくれている。

嫌だったんだけどな(笑)。上杉 無理やりこじつけていったような感じですけど、あれってなんで田原さんだけの名前を出したんですかね、野中さんは。

田原 野中さんは娘さんに怒られたといっていましたね。なんで返した人の名前を出すんだと。なんでもらった人の名前を出さなかったんだと。

上杉 普通だったらもらった人の名前をいうべきですよ。

田原 いやまあね、あの、まあ、終わり(笑)。

何とも消化不良だったが、放送終了後に田原氏はツイッターでつぶやいていた。

〈今朝、5時に帰宅するなり娘に「なぜ機密費の話が上杉さんから出たときに曖昧にしたのか」と怒鳴られた。機密費の話は話せば長くなるので言うのをためらった〉

田原氏に怒鳴った娘さんの感覚こそが、ごく普通の感覚だろう。それを十分に理解している田原氏さえもが話すのをためらってしまったところに、この問題の根の深さがある。

いま、すべての言論人に、官房機密費問題にどう対峙するのが厳しく問われている。

勝谷氏が「匿名性の陰に隠れている」と批判した記者クラブも、その例外ではない。

5月26日にBSデジタル放送のBS11『Inside OUT』に司会の小西克哉氏の紹介で出演した際、私は毎日新聞論説委員の金子秀敏氏と論戦を交わした。金子氏は当初、「私はそういう体験ないんですよ」といつていたが、その後、自身の体験談について語り始

めた。

金子 私の経験でいうとですね、ある人から選挙区に遊びに行こうと誘われることがあるんですね。「靴買ってやるから、いい外国の、イタリーの靴買ってやるから、サイズをいえ」。そのとき、自民党の職員から、「ダメだよ。あの人から物もらったりしちゃ、絶対ダメだよ」って。私は右も左も分かんなかったから、いったんもらっちゃったら、いうがままの使い走りになっちゃうんですよ。けどそれは、自民党の職員がやめろってちゃんとサイン送ってくれましたね。

上杉 ちょっと不思議なのは、渡した側は、外遊のときの飛行機でお土産代を渡したり、Yシャツ券を渡したり、料亭や料理屋で御馳走したりと、みんなあったといっているのに、まったくそういうの1回もないんですか。

金子 私は全然ないですよ。小西 私の知っている某テレビ局の記者が、新人のと